

201x 年度 修士論文

教育学研究科・教育学部学位論文執筆要綱

— 生涯学習基盤経営コース及び教育実践・政策学コース向け —

東京大学大学院 教育学研究科

総合教育科学専攻

生涯学習基盤経営コース

23-000000

本郷 弥生

指導教員：浅野 柏子 教授

目次

第 1 章	体裁ガイドライン	1
1.1	言語	1
1.2	製本上の構成	1
1.3	全体のレイアウトと文字組み	2
1.3.1	レイアウト	2
	表題紙	2
	目次	2
	本文	2
1.3.2	書体・書式・文字サイズ	2
1.4	本文の構造化方法	3
1.5	本文の表記方法	3
1.6	参考文献スタイル	5
1.6.1	参照方法	5
1.6.2	文献リストの記述方法	5
	図書の場合	5
	翻訳書の場合	6
	編集書の一部（図書形態の論文集の一論文を含む）の場合	6
	逐次刊行物掲載記事（雑誌論文を含む）の場合	6
	Web 上のリソース	7
第 2 章	テンプレート使用方法	8
2.1	ファイル構成	8
2.2	LaTeX	9
2.2.1	スタイルファイル	9
2.2.2	メインファイル	9
2.2.3	コンパイル	10
2.2.4	執筆	10
	強調	10
	引用	10

	参照	11
2.2.5	参考文献	11
2.3	Office	12
2.3.1	表紙	12
2.3.2	スタイル	12
2.3.3	執筆	13
2.3.4	Tips	13
参考文献		14
付録 A	製本について	15
付録 B	研究遂行上の注意	16
B.1	研究倫理	16
B.2	インタビュー・質問紙調査	16
付録 C	参考文献管理	17
付録 D	論文執筆に役立つ資料	18

図目次

1.1	サンプル画像として著名な Lenna Sjööblom さん	4
-----	--	---

表目次

1.1	文字から構成される論文上の要素に用いるべき書体・書式・文字サイズ	3
-----	--	---

第 1 章 体裁ガイドライン

本文書は、東京大学教育学研究科生涯学習基盤経営コース及び同教育学部教育実践政策学コースの所属学生が執筆する学位論文の執筆スタイルを規定するものである。以下、断りが無ければ「本コース」を上記 2 コースの総称とする。本章でスタイルの詳細について記述し、次章では本文書の生成に用いたテンプレートファイルについて述べる。

1.1 言語

執筆に用いる言語は日本語または英語とする。ただし、教育学研究科修士論文要旨及び教育学部卒業論文要旨は必ず日本語で書くことになっている。以下、本節で説明するスタイルは日本語での執筆を対象とする。英語で執筆する際は、研究対象の領域に最も近い学術雑誌のスタイルガイドを選び、準拠すること。その際、準拠したスタイルガイドは学位論文中に明記せよ。

1.2 製本上の構成

本コースの学位論文は A4 用紙に印刷し、左綴じで製本のうえ提出すること。このとき枚数が少なすぎると安定しないので、100 ページ以内であれば片面印刷するとよい。その他、本コースにおける製本の規定及び実践的なアドバイスについては付録 A で案内があるので参照されたい。学位論文の中身は次の順番で製本すること。

- 表題紙
- 目次
- 本文

以上の構成要素の詳細については 1.3 節以下を見よ。卒業論文は本文が 20 枚以上であることが要件である*¹。

*¹ 修士論文には枚数規定はない。

1.3 全体のレイアウトと文字組み

以下はテンプレートを適切に利用すれば自動的に適用される。

1.3.1 レイアウト

表題紙

提出年度と学位論文の種類（修士論文または卒業論文）を上余白 40mm 以上とって配置し、そこから 45mm 程度を空けて論文題目（サブタイトル含む）を置くこと。下余白 30mm 程度の位置に、自身の所属（大学・大学院名、学部・研究科名、学科・専攻名、コース名）、学籍番号、氏名、指導教員名・職名を記述せよ。文字は全て中央揃えとする。表題紙にはページ番号を振らない。

目次

表題紙に続けて、本文の章節目次を作成する。目次タイトルと目次本体があれば、後者のレイアウトは 1 段組である限りにおいて自由とする。図表を含むときは図目次、表目次の順に追記するようにせよ。このとき、各目次は改ページしたうえで連結すること。また、目次にはローマ数字 (i, ii, iii, ...) など本文と異なる数字を用いて独自のページ番号を振るようにする。ページ番号の場所は本文（1.3.1 項）に同じ。

本文

本文は 1 段組で構成し、文字数は 1 行 45 字程度、行数は 35 行程度とする。余白は左右 25mm、上下 30mm 程度をとること。ヘッダーとフッターを考慮しても、本文と上下の余白が 40mm 以上離れていればよい。本文が 100 ページを超えて両面印刷にて製本する場合、奇数ページ・偶数ページごとに左右の余白を変えてもよい。

■ヘッダー・フッター フッター中央にはページ番号のみを配置し、原則としてヘッダーには何も書かないものとする。各節が十分に長いために読者が道に迷う可能性があるとの懸念に当たって、可読性のために章節タイトルを表示するなどの運用は可とする。

1.3.2 書体・書式・文字サイズ

本コースの学位論文の、文字から構成される要素は表 1.1 に示す書体・書式・文字サイズを用いよ。ただし、表題紙について、年度と学位論文の種類は項タイトル、所属・指導教員・学籍番号・氏名・指導教員は本文と同じとする。また、小項以下の項目立てを用いる場合には項タイトルと同じくし、頭に記号を用いるなどして項タイトルと差異化せよ。

表 1.1 文字から構成される論文上の要素に用いるべき書体・書式・文字サイズ

構成要素	書体	書式	文字サイズ
論文題目	ゴシック体	太字	18pt
サブタイトル	明朝体	立体	14pt
章タイトル	ゴシック体	太字	20pt
節タイトル	ゴシック体	太字	14pt
項タイトル	ゴシック体	太字	12pt
本文	明朝体	立体	11pt

1.4 本文の構造化方法

本文の構造は以下の順とする。

1. 各章（注は脚注として内包）
2. 謝辞
3. 参考文献
4. 付録

各章の内部は、論理的に章・節・項の3階層に収まるのが構成のわかりやすさと読みやすさの観点から望ましい。節・項の番号付けはハーバード方式（2.3.1のような形式）とする。小項以下は箇条書きなどで適宜代用し、目次への記号の反映は任意とする。

付録と謝辞は章と同等の扱いとするが、付録にはアルファベット大文字で「付録 A」などと番号付けする一方、謝辞には章番号をつけないものとする。参考文献の詳細はあとで述べる。

1.5 本文の表記方法

■**句読点** 和文は句点を全角コンマ（,）、読点を全角読点（。）とする。欧文中では半角のコンマ（,）とピリオド（.）を用い、半角スペースを後置する。また和文中に欧文の句を挿入する際には、半角スペース相当の空白を入れること^{*2}。

■**強調** 文章の一部、単語や句を強調したい場合、和文には**太字**のみを用い、斜体は使わないようにせよ。このとき太字はゴシック体にするのが望ましいが、統一されている限りにおいて明朝体でもよい。読みにくくなるため、引用文で用いられている以外は下線、圏点の利用は控える。

一方、欧文の強調はセリフ体の斜体を基本的に用いることとし、太字・ゴシック・下線の利用は控える。ただし、強調したい和文キーワードの一部に欧文が含まれる場合は、和文と揃えて太字に

^{*2} Word でも LaTeX でも自動で入る。



図 1.1 サンプル画像として著名な Lenna Sjööblom さん

する（例：MARC フォーマット）。

以上において控えるべきとした強調方法については、強調部分のなかでさらにその一部を強調したい場合であれば利用してよいものとする。

■図表 図表は任意の位置に置いてよいが、図表番号及びキャプションを必ず付与すること。ただしその位置は、表については上に、図については下に付与するものとする（e.g., 表 1.1, 図 1.1）。図表番号はハーバード方式に従っても、全体を通して連番としてもよい（本要綱では前者とした）。

■記号 本文中でよく使われる一方で誤用の多い記号類について注意点を述べる。

二重かぎカッコ（『, 』） 和文書籍の書名を表すときに用いよ。英語と違って太字にしないこと。

丸カッコ（(,)） 欧文中で丸カッコを使うときはその前後にスペースを入れることに注意せよ。

また、和文を内包させる場合は全角にする。

その他、とくに欧文（英語）環境における正しい記号の使い方は **english punctuation** などのキーワードで web 検索するとよい。

■引用 参考文献の一部を文字通り引用する場合、本文中に埋め込む方式（inline quote）とパラグラフとして分離する方式（block quote）の 2 つがある。inline quote であるが、次に示すようにかぎカッコ（「, 」）で引用部分を囲み、文中に埋め込めばよい。ただし引用文中にもかぎカッコがある場合は、二重かぎカッコ（『, 』）に変更すること^{*3}。

Inline quote

澤田昭夫は良い論文について「よい論文は統一 unity, 連関 coherence, 展開 development において優れた論文あるいは明確性 clarity において優れた論文」（沢田, 1983, p. 19）だとしている。

^{*3} 引用文がさらに 2 重かぎカッコを含む場合はかぎカッコに変更する。

次に block quote であるが、次のように前後と左側に余白を与えるようにする。3 行以上になるようであれば block quote を使うようにするとよい。

論文書きでもっとも大切なのは、問を疑問文の形で切り出すことで、それがレトリックで言う発見・構想です。もっとも大切だというのは、それができればつまり全体を貫く主な問が何であるかを確定することができれば、論文の首尾一貫性、統一性を保証する基本的条件が整ったことになるからです。

そのつぎに大切なのは、論文の構成、材料の配置です。その際、肝に銘じなければならないのは、構成・配置の大原則は起承転結ではなく、序・本・結（序と本論と結び）だということです。（沢田, 1983, p. 74）

いずれも引用元の参考文献と、当該引用文が記載された箇所（ページ番号など）を引用の末尾に明示すること。その記述方法は 1.6.1 項と同様である。

1.6 参考文献スタイル

本説では、本文中で参考文献を示すときの参照方法と文献リストの記述法を述べる。

1.6.1 参照方法

基本的には主語として「著者 (年)」とするか、文末に「(著者, 年)」を置く *author-year* 形式が望ましいが、一貫している限りにおいて *number* 形式（参考文献に番号を振り、「[1]」のように参照する）も可とする。

1.6.2 文献リストの記述方法

基本的には、本項で紹介するスタイルを採用せよ。ただし論文全編にわたって一貫している限りにおいて、各自の研究領域に最も近いスタイルを使っても良い^{*4}。その際は指導教員やその指導を受けている先輩の院生に確認すること。リストに記載する文献の順番は「著者順」または「(本文での) 引用順」のいずれかとする。

図書の場合

和： 著編者名 『書名』 {版表示,} {出版地,} 出版社, 出版年, {総ページ数,} 当該部分のページ.

洋： author. title. {edition,} place of publication, publisher, year, {total page,} page.

^{*4} 例えば本テンプレートの参考文献リストは日本経済学会に準拠している。

- 近藤二郎 『社会科学のための数学入門』 東京経済新報社, 1973, p. 37–40.
- Barzun, Jacques and Graff, H. F. *The Modern Researcher*. Rev. ed., New York, Harcourt, 1970, p. 165.

翻訳書の場合

- 和： 著編者名 『書名』 [原書名 (イタリックで記載) {版表示,} {出版地,} 出版社, 出版年,] 翻訳者名, 出版社, 出版年, {総ページ数,} 当該部分のページ.
- 洋： author. *title of translation* [*original title*. {edition,} place of publication, publisher, year,] name of translator, place of publication, publisher, year, {total page,} page.

- Varles, Jana ed. 『情報の要求と探索』 [*Information Seeking: Basing Services on User's Behaviors*. North Carolina, McFarland & Company, 1987] 池谷のぞみ, 市古健次, 白石英理子, 田村俊作訳, 勁草書房, 1993, p. 10.
- Schneider, Georg. *Theory and History of Bibliography*. [*Handbuch der Bibliographie*. 6 Aufl., Berlin, Knopf, 1978,] tr. by R. R. Shaw, New York, Columbia University Press, 1934, p. 14–15.

編集書の一部（図書形態の論文集の一論文を含む）の場合

- 和： 当該部分の執筆者名 “当該部分の題名” < 編者名 『書名』 {版表示,} {出版地,} 出版社, 出版年 > {総ページ数,} 当該部分のページ.
- 洋： author. “*title*”. <editor. *book title*, {edition,} place of publication, publisher, year> {total page,} page.

- 宮坂広作 “余暇と社会教育” < 碓井正久編著『社会教育』第一法規, 1970> p. 201–203.
- Groom, Geoffrey. “Bibliography of older material” <Garvin, L. H. ed. *Printed Reference Material*. 2nd ed., London, Library Association, 1984> p. 456–501.

逐次刊行物掲載記事（雑誌論文を含む）の場合

- 和： 執筆者名 “論題名” 『掲載逐次刊行物名』 vol. XX, {no. XX,} 発行年{月}, 当該部分のページ.
- 洋： author. “*title*,” *name of periodical*, vol. XX, {no. xx,} year{month}, page.

- 小野寺夏生 “‘Bibliostatistics’: 情報現象の統計学的説明” 『情報管理』 vol. 21, no. 10, 1979, p. 782–802.
- 小野寺夏生, 中井浩 “単純なモデルからの Zipf の法則の導入” 『情報科学技術研究集会論文集』 vol. 33, no. 3, 1977, p. 129–138.
- Brookes, Bertram C. “Theory of the Bradford Laws,” *Journal of Documentation*, vol. 33, no. 3, 1977, p. 180–209.
- Nelson, Micheal J. and Tague, Jean M. “Sprit Size-Rank Models for the Distribution of Index Terms,” *Journal of the American Society for Information Science*, vol. 36, no. 5, 1985, p. 283–296.

Web 上のリソース

web 上のリソースについては、書誌情報の最後に“入手先 URL（アクセス日）” (“available from (URI), (accessed date)”) を記入する。それ以外の項目は図書並びに逐次刊行物掲載記事の規定に準じ、入手先の情報から明らかである項目を記述せよ。

情報メディア学会 “『情報メディア研究』への各種原稿の投稿について”
<http://www.jsims.jp/toko.html> (アクセス日: 2008/10/27)

第 2 章 テンプレート使用方法

2.1 ファイル構成

本テンプレートは下記のような構成となっている。

- `thesis_guideline.pdf`: この要綱のファイル
- **LaTeX/**
 - `thesis_main.tex`: このファイルに自分の論文を書く
 - `thesis_main_sample.tex`: この要綱の `tex` ソースファイル (参考・ \TeX 環境のテスト用)
 - `sample_bibliography.bib`: この要綱で用いた BibTeX による参考文献リストファイル
 - `jecon_custom.bst`: BibTeX 用の参考文献スタイルファイル
 - `latexmkrc`: latexmk による自動コンパイルの設定ファイル
 - `lllstdcpp.sty`: この要綱のスタイルファイル
 - **figure/**: 画像ファイルの格納場所
 - * `Lenna.png`: サンプル画像 (図 1.1)
 - **body/**: 本文の `tex` ソースを置く場所
 - * `sample_guideline.tex`: 第 1 章 のソースファイル
 - * `sample_usage.tex`: 第 2 章のソースファイル
 - **appendix/**: 付録の `tex` ソースを置く場所
 - * `sample_appendix.tex`
- **Office/**: Office ソフトウェア向けテンプレート集
 - `msword_template-master.docx`: Word® を用いる場合はこのファイルに執筆 (修士論文用)
 - `msword_template-bachelor.docx`: Word® を用いる場合はこのファイルに執筆 (卒業論文用)
 - `libreoffice_template-master.docx`: LibreOffice を用いる場合はこのファイルに執筆 (修士論文用)
 - `libreoffice_template-bachelor.docx`: LibreOffice を用いる場合はこのファ

イルに執筆（卒業論文用）

執筆に用いるソフトウェアに応じて、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 版か Office 版を選択せよ。以下の節では、それぞれのフォーマットについて、その使い方を説明する。

2.2 LaTeX

本テンプレートファイルは TeXLive の 2016 以降のバージョンに対応している。以下、使用する OS に応じた最新の TeXLive をインストールしている前提を置く。また、基本的な使用方法については理解しているものとする。

本テンプレートは、`thesis_main.tex` を論文の骨格の記述に使い、章ごとに分割された `tex` ソースファイルを本文 (body) と付録 (appendix) で区別して管理する構成となっている。

2.2.1 スタイルファイル

`lllsdepp.sty` が第 1 章で指定した体裁を再現する。すでに多数のマクロ・パッケージが読み込まれている状態であるが、執筆において使用したいマクロ・パッケージがある場合はこの `lllsdepp.sty` の該当箇所において直接宣言してほしい。`thesis_main.tex` のプリアンブルで `\usepackage` によるパッケージ読み込みは避けること。これは本テンプレートで使用している `creveref` というパッケージの制約により、`creveref` より後の行でのパッケージ読み込みが禁じられているためである。ただし、執筆において使用したいマクロ・パッケージの動作が、`lllsdepp.sty` にデフォルトで記述されているマクロ・パッケージの読み込み順を変更しないと保証されない場合は、この限りではない。

2.2.2 メインファイル

`thesis_main.tex` には、表紙に記入すべき情報と各章の `tex` ソースの読み込み順を記述する。まず、8 行目から次のような記述があるので、指示に従って執筆者自身の情報に書き換える^{*5}。

```
% ===== 執筆者記入事項 ここから =====
\thesisNendo{201x} % 提出年度
\thesisClass% 所属 下記 2 行のうち当てはまる方をコメントイン
% {教育学部} % 卒業論文
{教育学研究科} % 修士論文
\thesisAuthor{本郷 弥生} % あなたのお名前（姓名は全角スペースで分ける）
\thesisAuthorID{23-000000} % あなたの学籍番号（半角）
\thesisTitle{教育学研究科・教育学部学位論文執筆要綱} % 論文題目
% サブタイトルがなければ下の行をコメントアウト
```

^{*5} 提出年度を自動化しないのは、当該年度以降に学位論文 `tex` ソースをコンパイルしたときに提出年度が上書きされるのを嫌うため。

```
\thesisSubTitle{生涯学習基盤経営コース・教育実践政策学コース向け} % サブタイトル（ダッシュなし）
\thesisTeacher{浅野 柏子 教授} % 姓 [半角スペース] 名 [全角スペース] 職階
% ===== 執筆者記入事項 ここまで =====
```

各章の tex ソースは、執筆者の章立てにおいて意図する順番に `\include` コマンドで読み込む。章の入れ替えが楽になるほか、1つのファイルが大きくなりすぎてエディタで扱いづらくなることを防ぐ。

2.2.3 コンパイル

本テンプレートを用いた文書は、`latexmk` を使った次のコマンドをシェル上で実行してコンパイルせよ。

```
$ latexmk -pvc thesis_main.tex
```

`latexmk` は、`include/input` を用いて分散化された tex ソースの構成を追跡し、`BibTeX` ないし `Mendex` といった補助的に用いるコマンドを適切なタイミングで自動的に実行する `LATEX` 文書ビルドツールである。`pvc` オプションを与えることにより、tex ソースファイルの変更を逐一監視してくれるので、本文を通常通り保存するだけで種々のコンパイルが実行されるうえ、PDF ビューワを開いて最新の状態を表示してくれるようになる。そのための設定ファイルが `latexmkrc` である。設定を適切に反映するために、上記のコマンドは `LaTeX`/フォルダ直下で実行すること。OS ごとの実行コマンドの違いはこの `latexmkrc` が吸収しているので、執筆者は不具合のない限り `latexmkrc` の存在を意識する必要はない。

2.2.4 執筆

実際の執筆において本テンプレートが推奨するコマンドを説明する。

強調

基本は `\emph` を用いよ。これにより欧文では斜体、和文では太字が使われるようになる。本テンプレートのスタイルファイルでは `otf` パッケージの `bold` オプションを有効にしているため、太字はすべてゴシックになる。

引用

素の `LATEX` 文書においては ‘`...`’ や `quote/quotation` 環境が用いられるが、本テンプレートでは `csquotes` の使用を推奨している。スタイルファイルには既に導入されているので、`inline` と `block` それぞれで次のようにコマンドを使い分けるとよい。

Inline

```
\textcite[<ページ番号; 例: p. 19>]{<引用キー; 例: sawada>}{...}
```

Block

```
\begin{displayquote}[<ページ番号; 例: p. 74>]{<引用キー; 例: sawada>}
...
\end{displayquote}
```

text/display と quote の前に一文字 cが入っていることに注意。この c は cite を意味すると思うとよい。オプション引数 ([] の中) の形でページ番号を指定すれば、自動的に引用文の後ろに参考文献情報が挿入される。

参照

ふつう、節や図表で付与した \label を \ref コマンドで参照するところ、本テンプレートでは \cref を使うと記述が楽になる。この \cref というコマンドは cleveref によって提供されるもので、lllssdepp.sty ではこれを日本語向けに設定してある。

例えば、章番号を引用するときに通常の \ref を用いた場合だと第 \ref{chp:hoge} 章と入力しなければならないが、cleveref を使うと、\cref{chp:hoge} だけで済むようになる。さらに cleveref は \label の貼られた場所がどういう環境であるかを自動で識別し、そこが章や節であれば「第 n 章」、「n.m 節」などと補完し、図表であれば「図 n」「表 m」と表示することができるので、あらゆるラベル参照を cleveref で代用することが出来る。

2.2.5 参考文献

本テンプレートでは pBibTeX を用いた参考文献処理が組み込まれている。したがって執筆者は BibTeX 形式で参考文献リストを準備するのがよい。また、参考文献スタイルとして（本テンプレートの指定とは異なり）経済学の標準的な形式を再現した jecon^{*6}を元にいくつかのオプションを変更した jecon_custom.bst を採用しており、和書・洋書が混在した参考文献リストが見やすく出力されるようになっている。本テンプレートの jecon_custom.bst は文献管理ソフトウェア Mendeley^{*7}で出力できる BibTeX 形式に準拠しており、とくに和文書籍・論文を CiNii^{*8}から Mendeley へとエクスポートしたときの BibTeX フォーマットにおいても著者の姓名が正しい順番に揃うように改変してある。

したがって執筆者は Mendeley を用いた文献管理を行いつつ、そのデスクトップアプリケーションから出力した BibTeX ファイル^{*9}を本テンプレートの sample_bibliography.bib と同じ階層に置くことで、快適な参考文献処理が行えるのである。ただし、BibTeX ファイルをその他の方法で独自に管理していて日本人著者の姓名が逆に表示される場合は、jecon_custom.bst の 168 行

^{*6} <http://shiroakeda.org/ja/tex-ja/jecon-ja.html>（アクセス日: 2017 年 7 月 19 日）

^{*7} <https://www.mendeley.com>（アクセス日: 2017 年 7 月 19 日）

^{*8} <http://ci.nii.ac.jp>（アクセス日: 2017 年 7 月 19 日）

^{*9} 詳しい方法は公式ドキュメントなどを参照されたい (<https://blog.mendeley.com/2011/10/25/howto-use-mendeley-to-create-citations-using-latex-and-bibtex/>)。

目から始まるオプションを 0 に変更せよ。

2.3 Office

Office ソフトウェア向けにもテンプレートを用意した。対応しているソフトウェアは、Microsoft Office Word[®] と LibreOffice^{*10} である。

Word[®] 版のテンプレートはファイル形式として `.docx` を採用した。本テンプレートは Office 2016 以上のバージョンが推奨である。それ未満のバージョンにおけるテンプレートの動作不良は一切サポートしない。

LibreOffice 版はバージョン 5.3.4 で動作確認している。それ以上のバージョンであれば動作に大きな問題はないと考えられる。

Office テンプレートを使う場合は、 \LaTeX 版と違って以下の点が不便である。執筆には \LaTeX 版を使うことを強く推奨する。

- 目次はボタンを手動で押すなどして、半自動更新せねばならない
- 章節番号を手入力せねばならず、構成を変更したときに自動的に修正されない
- 章ごとの改ページを手作業で行わなければならない
- テキストファイルではないので、`git` などのバージョン管理システムを用いた編集履歴管理ができない
- 便利なテキストエディタを使えないので、非効率な GUI をポチポチと操作せねばならない
- Office ソフトウェアは長大なテキストの扱いが不安定で、論文が終盤に差し掛かるほどクラッシュしやすく、原稿が失われやすい
- 章ごとにファイルを分割して管理したくても、印刷は別々に行う必要があり、煩雑になる
- 本テンプレートの管理者はもっぱら \LaTeX を利用しているので、Office 版の不具合対応が遅れやすい

2.3.1 表紙

まず表紙に執筆者情報を記入する。記入すべき情報は修士論文か卒業論文かでそれぞれ異なるため、テンプレートファイルを正しく選ぶ。最初の行の**提出年度**を入力し、次に**論文題目**を記述する。名前、学籍番号、指導教員も忘れずに記入する。

2.3.2 スタイル

本文に適用するスタイルは、スタイル選択から適切なものを選ぶこと。「見出し 1-3」が章・節・項に対応しているほか、ブロック引用のための「引用」スタイルを用意している。

^{*10} <https://www.libreoffice.org> (アクセス日: 2017 年 7 月 19 日)

2.3.3 執筆

章の最後には必ず改ページを挿入し、次の章が新しいページから始まるようにせよ。このとき、目次は手動で更新する必要があるので、注意してほしい。

2.3.4 Tips

以下、あまり知られていない Word の使い方を列挙する。詳しい使い方は各自調べてほしい。

■**図表番号の付け方** [参照設定] タブの [図表番号] グループで、[図表番号の挿入] が可能だそうである。これにより、図表番号が自動で連番となる。

■**先行研究リストの作り方** 文献管理ソフトの Mendeley には Word 向けに参考文献を自動生成する補助アプリが搭載されている。CiNii その他からインポートした論文・書籍を引用するときに使用するとよい。

参考文献

沢田昭夫 (1983) 『論文のレトリック：わかりやすいまとめ方』，講談社学術文庫，第 [604] 号，講談社.

付録 A 製本について

修論・博論は「くるみ」製本以上の水準で製本するようにしてください。製本機での簡易の製本は、長期の保存に耐えないため、**禁止**とします。本文を自分で印刷し、下記に挙げるような店舗に持ち込むか、USB メモリ等に PDF を入れて店舗で直接印刷するとよいです。

- キンコーズ^{*11}
- コピーイン^{*12}

また、PDF データをオンライン入稿し、製本を送付してもらえるサービスもあります。

いずれにせよ、入稿から製本までにかかる時間をよく考慮して、提出期間に間に合うように準備してください。

^{*11} <http://www.kinkos.co.jp> (アクセス日: 2017 年 7 月 19 日)

^{*12} <http://www.copyinhongo.com> (アクセス日: 2017 年 7 月 19 日)

付録 B 研究遂行上の注意

B.1 研究倫理

東京大学大学院教育学研究科が発行している『信頼される論文を書くために 第3版』^{*13}をよく読み、研究及び論文執筆を行うこと。この冊子に書かれた要件が順守できていない学位論文は当然ながら受理されず、当該執筆者は修了に値しません。

B.2 インタビュー・質問紙調査

インタビューや質問紙調査、その他生身の人間を対象とする研究においては、「ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会」の規程^{*14}に従って倫理的な方法を用いるようにしてください。そして、インタビューや質問紙調査の対象となった個人や組織は論文中では匿名としてください。また、インタビューの書き起こしについては、インタビュー相手の了承を得て実施してください。

個人情報を調査の過程で入手する研究では、準拠した個人情報保護ガイドラインおよび個人情報提供者の承諾を得ている旨を論文中に明記してください（研究方法の章など）。個人情報保護法により「大学その他の学術研究を目的とする機関若しくは団体又はそれらに属する者」が「学術研究の用に供する目的」で個人情報を取り扱う場合、「必要な措置を自ら講じ、かつ、当該措置の内容を公表するよう努めなければならない」と定められています（同法第66条第3項）。例えば、日本教育学会の個人情報保護ガイドライン^{*15}などが参考になります。

^{*13} http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~edudaiga/sonota/manural_march2017.pdf（アクセス日: 2017年7月19日）

^{*14} 世界医師会の「ヘルシンキ宣言」に準ずる

^{*15} http://www.jera.jp/outline/privacy_g/（アクセス日: 2017年7月19日）

付録 C 参考文献管理

Mendeley と GaCos の使い方を知っておくとよいでしょう。

付録 D 論文執筆に役立つ資料

準備中